



闇に眠るもの

3月21日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

3月21日のおはなし「闇に眠るもの」

地下に潜ってすでに3時間が経過しようとしていた。フランツとジルは嬉々として案内してくれる。2人は何事か話し合いながらくすくす笑い、楽しくて仕方がないといった風に次から次へと興味深いスポットを示してくれる。まったく飽きることがないままあっという間に3時間が経過した。ふと疲れを感じて時計を見て、もうこんなに歩き続けていたのかと驚いたわけだ。それにしても、この都市の地下にこれほど広大な人工の空間が広がっていようとは想像もできなかった。

3時間前。2人に案内されて、ホテルの脇の古い寄宿舍のような建物にしのみこみ、建物の一隅にある狭いマンホールから潜り込むとすぐに石灰岩の洞窟めいた空間が出現した。フランツが持って来た強力な照明に浮かびあがる空間は、一見天井の低い地下室のようでもあるけれど、よく見ると、天井を支えるための短い壁を別にすれば、前後左右どこまでも続く果てしない空間だった。ホラータッチのダンジョンゲームを思い出して思わずわたしは身震いした。

最初に案内されたのは、つい最近若者たちがパーティーを開いたと思われる残骸の残る場所だった。空になったワインのボトルが何本も転がり、まだチーズの香りが残っている気がした。フランツとジルもこういうパーティーに参加するのかと尋ねたが2人は肩をすくめ首を横に振った。しばらく狭い坑道のような下り坂を進んで、やがて出現したのはかつて修道院として使われていた大きなホールのような空間だった。そこにはやや腐食し始めた奇怪な彫像がいくつも建ち並び、荘厳な柱が林立している。

四つん這いになって進まなければならないような狭い穴をくぐり、大量の人骨が積み上げられた地下墓地を何度かかすめた。途中聞かされる話も驚嘆するようなものばかりだった。猫の首が大量に発見された場所。最初は黒魔術でも行われたのかと思われたが、実はその場所の真上にはウサギ料理を標榜するレストランがあったらしい。その店では本当はウサギを出していなかったというわけだ。19世紀には好奇心旺盛な上流階級の奥様方を対象にいかがわしい地下ツアーが行われていたという。黒魔術の現場で本物のサタンを見せるという触れ込みで、実質的には一種の乱交パーティーが繰り広げられていたそうだ。

そもそもなぜこんな空間が広がっているのかということに関する説明も興味深かった。簡単に言えば、この街の建築は石造りだからということになる。庶民はともかく、王侯貴族や教会は大量の石材を必要とした。それをどこから運んでくるか？ そう、地下からである。逆に言えば、良質の石材が確保できる土地にのみ大都市は発達できたのだという見方もできる。ヨーロッパの街ならどこでも似たようなことが起こるらしい。近隣の山を切り崩し、街そのものの地下に石切り場をつくる。そんなこと、考えたこともなかった。

やがてわたしたちがたどりついたのは、20世紀の初め頃にかかりの人数で集落を形成していたと思われるエリアだった。そこは中央に広場があり、まわりを集落のメンバーの家が取り囲んでいた。極めて珍しいことに墓地がその中央広場にあった。いわゆる未開の部族で墓をセンターにする文化は見られるが、西欧においては極めて珍しいといえるだろう。西欧では墓地は通常、集落の境界付近や教会などの施設に併設し、あるいはそれこそ地下などの目に見えないところに隠してしまうものなのだ。

他の場所とは異なり、ここには天井から垂れるつらら状の鍾乳石があるので、天然の洞窟なのかと訊くと、その両方だと言う。元々の鍾乳洞も利用しているし、人間が掘り進めたところもある。鍾乳石が見られるのは地表部分が舗装されておらず雨水がそのまましみ込んでくるせいだと言う。わたしたちのヘルメットについてライトと、フランツの持って来た強力な照明を浴びて、それらの鍾乳石がそれぞれの背後に複雑な影を落とし、まるでたくさんの人が遠くにざわめいているかのように見えた。

フランツとジルは二人で何ごとか相談すると、この場所でしばらく休憩すると宣言した。そしててきぱきとレジャーシートを広げ、サンドイッチとワインとポットに入った熱いコーヒーを用意した。わたしたちはくだらない冗談を言いあいながら遅めのランチを味わった。たくさん歩いた後で空腹だったが、地下空間の人工的な照明のもとで食べる食事は、屋外で食べるピクニックとは違い、隠れ家的なクラブで夜食をついばんでいるような、どこことなく頹廢的な雰囲気漂っていた。

食事を食べ終わるとフランツがわたしに訊いた。この場所を見てどう思うかと。わたしは感じるままに、非常に印象的だと答えた。印象的とはどういうことだとちょっとせっかちな調子でジルが訊いた。わたしがきょとんとしているとフランツが笑いながら、どのへんが印象的かと尋ね直した。どのへんが印象的か？ 改まって訊かれて考え込んでいると誰かがつぶやいた。キラキラが出るよ。

わたしの顔を覗き込んでいたフランツとジルの笑顔が凍ったように見えた。そこには期待と喜びと、同時に底知れぬ恐怖がはりついていた。次の瞬間、わたしの顔を覗き込む2人の顔が消えた。2人の顔だけではない。ランチの残骸もワインボトルも広場も家も床も天井も鍾乳石もその影も何もかもが消えた。3人のヘルメットのライトとフランツの照明装置と、そのすべてが同時に一瞬にして消えたのだ。フランツとジルが息を呑み込むのが聞こえた。そして完全な闇が訪れた。

キラキラが出るよ。再びあの声があった。その時にはもう、それがわたし自身の口から発せられていることがわかっていた。そしてわたしの中で眠っていた誰かが目を覚まし、記憶を取り戻し、この場所で仲間たちと暮らしていた日々のことを思い出していた。

不意にそれは始まった。暗闇のありとあらゆる方角に小さな光の点が現れたのだ。キラキラだ。ジルが囁くように言った。そうこうするうちにも光の数はどんどん増えて、あたりを満たして行った。星みたいだね、きれいだ。わたしの中のもう一人のわたしが言い、フ란ツがほとんど尊敬の念を込めたような口調で、はい、と答えた。上も下も前後左右もすべての方角にキラキラが輝き、わたしたちは宇宙空間に浮かんでいるかのようだった。

(「キラキラ」 ordered by さんぽ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

闇に眠るもの

<http://p.booklog.jp/book/46697>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46697>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46697>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.